
春の歩道

坂田火魯志

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

春の歩道

【Nコード】

N1870G

【作者名】

坂田火魯志

【あらすじ】

春のうららかなになってきた中でその季節や人の心を見つつ書いた詩です。三十あります。

第一章

1．内緒のこと

いつも文句ばかり言う僕の彼女

ああして欲しいこれを買って欲しい

勝手気ままに振舞っていつも僕を困らせてばかり

そんな彼女に一度辟易して

怒ったらその場で泣き叫んでしまったよ

涙も流して声もあげて

まるで子供みたいに泣き叫んだ

そんな我俣で愛されたい彼女の気持ち

それは子猫のようなもの

我俣な心を抑えられないで僕の側にいたい

実はそれが心から嬉しい　内緒のことだけれど

何かと我俣なのが僕の彼女

ドライブも好きだし旅行も好き

何かと僕に注文をつけては一緒にいようとする

そんな彼女に一度聞いたよ

好きなのかどうか聞いたらその返事は

顔を真っ赤にさせて黙った

そこから何も言えなくなった返事

実は照れ屋で恥ずかしがりで素直じゃない

まるで小兎みたいに

寂しくていとおしい彼女の心を知って

何かとても温かくなった 彼女に言うことはないけど

そんな我儘で愛されたい彼女の気持ち

それは子猫のようなもの

我儘な心を抑えられないで僕の側にいたい

実はそれが心から嬉しい 内緒のことだけれど

お菓子を食べに来ないかと

誘うあの人は年上で　僕の憧れの人

その誘いに断れず

家に入るとそこに待っていたのは

妖しい笑みを浮かべるあの人

何があるのか何を考えているのか

そこがとても気になる　お菓子よりも

甘い罠はどうやらとんでもないものがあつて

僕を誘い込むものだったみたいだ

帰ることはもうできない　妖しい笑みを前にして

今憧れの人の家にあがつた　全てははじまった

お菓子よりも甘いものは

あの人の唇と胸だった　憧れの人のも

その身体はお菓子よりも

まだ甘くて離れないものだった

憧れの人が今僕を抱いてくれて

何もかもを僕に教えてくれた

これからは二人なの　　そうも言ったし

甘い罖はそのまま僕達と一緒にさせた

僕はそれがわかっていたけれど

誘いに乗ったんだ　　この人が好きだから

憧れの人の誘いは甘い罖　　お菓子より甘い

甘い罖はどうやらとんでもないものがあって

僕を誘い込むものだったみたいだ

帰ることはもうできない　　妖しい笑みを前にして

今憧れの人のお家にあがった　　全てははじまった

3．大雨

何か久し振りに雨が降って

嬉しいような楽しいような

鬱陶しい雨も長く見ないと寂しくなるもの

激しい雨もたまにはないと不安になる

ここまで降らないと大丈夫なものかと

けれど今降ってくれた長い間激しく降ってくれる

そんな雨を見てほっと落ち着く気持ちになる

鬱陶しいと思う気持ちはそこにはなくて

ただ雨が嬉しい 銀色の雨が嬉しい

そのまま暫く降り続けて 僕達に潤いを与えて欲しい

暫く見なかった雨が降って

心が嬉しくなってきた

恵みの雨と言うべきかやっと降った

奇麗な雨が街にも山にも降ってくれて

乾いていた世界を潤してくれている

静かではなくかなり激しく降り注いでくれて

それを見ている僕の心まで潤してくれる

穏やかな気持ちにさせてくれる雨に

感謝して今は 銀色のワインを出して

降り続ける雨に乾杯 雨を見ながら酔うことにした

鬱陶しいと思う気持ちはそこにはなくて

ただ雨が嬉しい 銀色の雨が嬉しい

そのまま暫く降り続けて 僕達に潤いを与えて欲しい

第二章

4・春の海辺

鉛色の空も海も終わり

目の前の海は少し奇麗になっていた

けれどそれは夏の海とは違って

まだ少ししか青くなってはいない感じだった

物足りなくて 何処かはじまったばかりの感じだった

それでも暗い雰囲気はやっと消えて 明るくなってきていた

春の海ははじまりの海で 青もまだ弱いけれど

そこには希望がある気がした 沈んではいなかった

足元を見ればそこには元気に泳ぐ魚達がいた

命もまたはじまろうとしていた そんなSPRING SEA

冬景色の空も海もなくなつて

気分が少しだけましになってきた気が

まだその気持ちは少しだけど

微かな青が僕の心に及んできたよ

寂しくて 沈んだ気持ちになりやすかったけれど

そんなくらい心もやつとなくなつて 少しましになつたよ

春の海は気持ちを楽に その気持ちで見たい

これから青くなつていくのは 空と海だけじゃない

僕も海の中にいる数多くの命もそれは同じで

綺麗な青になつていくんだ それがSPRING SEA

春の海ははじまりの海で 青もまだ弱いけれど

そこには希望がある気がした 沈んではいなかった

足元を見ればそこには元気に泳ぐ魚達がいた

命もまたはじまろうとしていた そんなSPRING SEA

5・感じる気持ち

感じる気持ち 誰だつて同じさ

誰かを愛する気持ち 僕にだつてある

誰にも言わないけれど君にだけ言つよ

僕は君が誰よりも好きだつて

君にしか言えない言葉　　今君に

君が頷いてくれるまで何度だつて

言つてみせる振り向かせたい

その気持ちは僕の心の中にある

何時だつて何処だつて言えるさ

君に捧げるこの気持ちは変わらないつて

感じる気持ち　　僕だつてあるよ

君を愛しているさ　　他の誰よりも

君が側にいてくれるから幸せだから

僕は君をずっと見ていたい

君をずっと側で守つて　　これからも

君の笑顔が何よりも嬉しいから

だから僕は気持ちを伝える

君を愛しているというこの気持ち

何時だって何処だってそうさ

君を愛するこの心はいつも一緒だよ

その気持ちは僕の心の中にある

何時だって何処だって言えるさ

君に捧げるこの気持ちは変わらないって

6・D R U G

今日もいかした姿で街に出て

あちらこちらの女の子に声をかけて

朝までベッドで二人きり

それが俺の楽しみさ

遊びというD R U Gに溺れて

今日も明日も遊び惚ける

けれどD R U Gはそれだけさ

他にはない

女の子がDRUGだからそれだけでいいんだ

俺の好きなのは女の子だけ 他にはいない

P R E T T Y G I R L I S B E S T D R U G

麻薬に溺れる奴は馬鹿さ

女の子こそ最高のDRUGだから

今日もあの娘達を見て

声をかけては朝まで二人きりになって

楽しくベッドで遊ぶ

俺がするのはそれだけ

女の子というDRUGを味わう

それだけで俺は満足なのさ 何もいらぬ

DRUGは手の中で笑っているものだから

俺にとってはDRUGは女の子 他の何でもない

B E A U T I F U L L A D Y I S G O O D D R U G

少女も大人の女の人も

どんなDRUGよりも気持ちがいい

俺の好きなのは女の子だけ 他にはいない

P R E T T Y G I R L I S B E S T D R U G

麻薬に溺れる奴は馬鹿さ

女の子こそ最高のDRUGだから

第三章

7・ヒロインは素直じゃない

僕のことを見てくれているのに

こっちが見るとぶいと顔を背けるあの娘

僕も好きだしそれもわかってるのに

どうしてか僕の側には来ようとしな

あれこれと何かを言おうとしても止めてぶいと顔を背けられて

いい加減こちらをもどかしいけれど

待ってみたいと思った　言わせてみたいと思った

素直じゃないヒロインが素直になるのは

これはこれでいいものだから

だから待つてみる　彼女が言うのを

気持ちにはわかってるから

素直な言葉を楽しみにして

僕のことをじっと見て

やっと何かを言おうとしている彼女が

その気持ちを今やっと言おうとして

僕のすぐ側で顔を真っ赤にしている

何かここにまでなるのにとっても長い時間がかかって

それは待ち遠しかったけれど

けれど待ったかいがあった やと彼女の口から聞ける

素直じゃないヒロインが素直になるその時

それが今やっと来るんだ

彼女の口が開いて 僕を好きだと言う

その言葉を今耳にしてんだ

素直な彼女の心の言葉を

だから待ってみる 彼女が言うのを

気持ちはわかっているから

素直な言葉を楽しみにして

8・春の歩道

春の歩道君と二人で

歩いているのを心に噛み締めるよ

あの時勇気を出して君に告白したのも

君の手をはじめて握ったのもここで

そしてキスをしたのもここ

去年の春に君と出会って

告白して今こうしてここにいるね

春の歩道 君と二人歩いていく

その幸せを噛み締めて僕は

梅の花と君の顔を一緒に見て

二つ共ずっと見ていたくなつたよ

朝の歩道君と一緒に

並んでいるのが今も信じられない

あの時は一人だったけれど今は違う

君が隣にいてくれるということ

今も信じられないよ

春も夏も秋もこの歩道を

君と二人並んで歩いたけれど

それがまるで 夢のように思えるよ

幸せはささやかなものだけれど

それでも何か信じられなくて

今こうして君の笑顔を確認するよ

春の歩道 君と二人歩いていく

その幸せを噛み締めて僕は

梅の花と君の顔を一緒に見て

二つ共ずっと見ていたくなつたよ

9・楽園なんか無い

楽園なんかこの世にはないさ

パラダイスなんてここにはないんだ

あるのはただ現実だけさ

神様は見ているだけ 悪魔も覗いてるだけ

それが現実の世界さ

苦しみはいつもある それが現実さ

けれどそれだけじゃない 現実はそのだけじゃない

それがいいのか悪いのかはわからない

それでもそれが現実だから

楽園がなくても歩いていけばいい

ただそれだけのこと

楽園なんかありはしないさ

パラダイスは何処にもありはしない

あるのは目の前にあること

神様も助けてくれない 悪魔も誘惑しないよ

それはおとぎ話

けれど楽しみもある そういう世界さ

苦しみも楽しみも 現実の中にあるんだ

それが神様と悪魔だっていうのなら

それが現実だろうね

楽園がなくても笑顔でいられる

だからそれでいいさ

それでもそれが現実だから

楽園がなくても歩いていけばいい

ただそれだけのこと

第四章

10・希望と絶望

人には二つのものがいつも側にある

希望と絶望 その二つがいつも

落ち込むこともあれば楽しむこともある

その二つが人から離れることはない

絶望はしたくない希望だけがいて欲しい

そう思うのが常だけれど

絶望があるから希望もある

この二つが離れることはない

その二つと共にいるのが人なのだから

それを受け入れて生きるしかない

希望も絶望も一緒にいるけれど

二つの狭間で生きていくんだ

人にいつも一緒にいる二つのもの

希望と絶望 それは離れはしない

前が見えなくなったり見えたりするけど

いつもどちらかだけがいるわけじゃない

できれば希望だけが側にいて欲しいさ

けれどそれだけだと

人は楽しさがわからない

だから絶望もいるんだ

希望も絶望も鏡合わせのものだから

必ずどちらかを見てしまう

それが人間というもののなのだから

その二つの中を泳いでいくんだ

その二つと共にいるのが人なのだから

それを受け入れて生きるしかない

希望も絶望も一緒にいるけれど

二つの狭間で生きていくんだ

11．二本の梅

白い梅と赤い梅

二本の梅が庭に咲いていた

それを見て笑っている二人の女の子は

この家の女の子達だろうか

今は小さいあの娘達も

やがて大きくなって綺麗な姿になる

その時今彼女達が見ている梅は

今と同じように綺麗に咲いているだろう

梅も女の子も綺麗に咲いて

また笑っているのかはわからない

けれど今梅は咲いて女の子は笑っている

その今は確かにここにある

赤い梅と白い梅

それぞれが奇麗に咲いて

二人の女の子は仲良く並んでみている

姉妹だろうかその顔は

実によく似ていて可愛い

梅もその花の色だけが違っていて

どこから見ても姿形は全く同じもの

女の子達は奇麗になるが梅はこのまま

春になったらまた咲いてくれる

女の子達はその梅で春を知り

またこうしてこの庭で笑うのだろう

今見ているこの時を思い出して

梅も女の子も奇麗に咲いて

また笑っているのかはわからない

けれど今梅は咲いて女の子は笑っている

その今は確かにここにある

12・桜の別れ

夜に一人　桜の並ぶ中に一人

ただ一人で歩くその時は　ただただ寂しい

そんな中で見る桜は　静かにそこにあるだけ

花びらが舞い　僕の肩に落ちる

その花びらを手にして想うのは

この桜はすぐに散るということ

ずっと咲いて欲しいのに桜は散る

夢く　誰も待たずに散っていく

それからまたずっと出会えずに過ごす

桜は夢く散って何も告げない

せめて一言だけでも言い残せば別れも辛くないのに

夜に出会う　突然の桜吹雪

そこにいるのは僕だけで　桜達があるだけ

桜達は語りはしない　ただ花は散っていく

花は散って　僕の手にも一枚

散った花は二度と戻らない

いつもそのまま別れになる

けれどそうだからこそ桜は美しい

潔く　美しい別れがそこにある

また会えることを密かに知らせて

桜は潔く散って何も残さない

けれどその別れが他の何よりも綺麗でいとおしい

桜は儚く散って何も告げない

せめて一言だけでも言い残せば別れも辛くないのに

第五章

13・春の雪

暖かくなつたのは少しの間で

今は雪が降っている　白い雪が

白い雪が赤い梅の上に舞い降りて

それが何故か目に焼きついた

奇麗だけれど何か場違いで

不思議な感じがする赤と白だった

冬の雪と春の梅が合わさると

時間がどうにかなりそうだった

けれど春はもうここにいて冬はいない

雪は消えてそのままいなくなった

ただ赤い梅だけが残って咲いていた

急に寒くなつた今の春に

雪が静かに降ってきて　山を染める

赤い梅の上にもその白い姿を見せる

それは絵のように目に入る

春の世界に雪は合わない

けれど赤と白の世界を創る

冬の雪が春の梅を覆わんと

そのまま降ってくるのだった

けれどそれは適わない春の日

雪は少し暖かくなって消えた

そこに残ったのは結局春の赤い梅

冬の雪と春の梅が合わさると

時間がどうにかなりそうだった

けれど春はもうここにいて冬はいない

雪は消えてそのままいなくなった

ただ赤い梅だけが残って咲いていた

14・予定調和

毎日出会って喧嘩をしてすぐに仲直り

何処か予定調和でありきたり

けれどそんなありきたりの日常が

君と過ごす日常が大切なんだ

予定調和は悪くない　むしろいい

君といて一緒に笑うのが幸せだから

退屈な毎日だけれど君と一緒にただで

予定調和が凄くいいものになるんだ

些細なことも何かが加わるだけで

それで楽しいものになる

楽しい予定調和の日々を君と一緒に

笑って喧嘩して過ごしたいんだ

毎日笑い合って何かを一緒に食べて

そんな予定調和の毎日に

君という少しの存在があるだけで

予定調和こそがいいと思えてきたよ

それでいつものことが あつてよくなる

君と一緒にいる幸せが日常になるから

退屈だった毎日が一転して楽しいものに

鮮やかなまでに変わったんだよ

君がいるという幸せを噛み締めて

楽しい毎日を共に過ごすだけ

予定調和も幸せだったならそれでいいんだ

いつもの笑顔もお喋りも飽きはしない

15・柔らかい棘

まだ若い薔薇の木の

その棘を少し触ってみる

あの痛さはそこにはなく

少しばかりの柔らかさがそこにある

まだ備わっていない痛さが無いのが楽しくて

また触ってその感触を楽しむ

けれどそれは今だけのことで

もう少ししたらあの痛い棘になる

今の薔薇はすぐに消えて

あの痛い棘を持つ薔薇になる

まだ淡い薔薇の花

その花は蕾でしかない

色も何かあまりに幼くて

香りもまだそんなに強く感じない

小さな小さな花びらが少し見えるだけで

大輪には程遠い姿だった

しかしこの蕾がやがて大輪に

香りも辺りを覆うばかりになる

その時の薔薇は美しく

あの全てを魅了する薔薇になる

些細なことも何かが加わるだけで

それで楽しいものに変わる

楽しい予定調和の日々を君と一緒に

笑って喧嘩して過ごしたいんだ

今の薔薇はすぐに消えて

あの痛い棘を持つ薔薇になる

第六章

16・煙草の煙

小さい頃は煙草の煙が不思議だった

夜の部屋の中で祖父が吸う煙草の煙は

青くてテレビの灯りの中にゆらゆらとしていた

煙は白くはなかったから　それが不思議だった

青い煙を見ているとどうしても

何かそれが特別なものに見えた

煙草の煙は普通じゃなくて　それを吸う祖父もまた

特別なものに思えたのは今ではもう昔のこと

大人になって見る煙は何でもない

けれどその色は相変わらず青いまま

青い煙は今も部屋の中でゆらゆらと

青い煙がとても不思議だったあの時

大人が吸う煙草の煙がどうして青いのか

そのことが気になって仕方なかったあの時

白い煙に慣れていたから　その青が不思議で

夜にくゆらぐその煙が

ここにあるものに思えなかった

それが大人の証に思えて　何時か吸いたいと思った

けれどそう思ったのはほんの子供の頃で

煙草を吸わなかった僕は今は

青い煙で子供の頃を思い出すだけ

煙草の煙は普通じゃなくて　それを吸う祖父もまた

特別なものに思えたのは今ではもう昔のこと

大人になって見る煙は何でもない

けれどその色は相変わらず青いまま

17・メリーゴーランド

子供の頃よく乗ったメリーゴーランド

今は見て楽しむだけ

彼女が乗って朗らかに笑っているのを見る

それだけだけれどこれが楽しい

彼女の笑顔を見ていると僕まで幸せになるから

楽しく回るメリーゴーランド

彼女はそこから僕に向かって微笑んでくれている

その顔を見ているだけで僕は

心が楽しくなって回るから

メリーゴーランドの楽しみ方は一つじゃない

今は大人の楽しみを味わっている

子供の頃のメリーゴーランドの思い出

いつも乗って遊んでた

今は乗ることはないけれど彼女が乗っている

それを見て僕はにこやかに笑う

彼女の笑顔を見ているだけで幸せになれる

楽しみを与えるメリーゴーランド

彼女の笑みが見えたり消えたりそれを追ったりで

そうして僕は楽しんでいる

心も一緒に楽しく回る

メリーゴーランドは楽しみを回りに与えてくれる

それをわかったのは大人になってから

メリーゴーランドの楽しみ方は一つじゃない

今は大人の楽しみを味わっている

18・ほどけないリボン

どうしてもほどけないリボン

子供の頃の思い出の一つ

何をしてもほどけなくていらいらした

そのことは今も覚えている

ふとりボンを見て思い出すのはそのこと

今は簡単にどんなリボンもほどける

けれどほどかれたリボンは何処か虚しい

子供の頃はほどくのにあんなに苦勞したのに

今じゃ一瞬で終わってしまう

嬉しいはずなのに何故か寂しい

ほどけたリボンを見てそれを感じる

ほどけなかったリボンが

子供の頃気になっていたよ

ほどけなくて悔しい思いをしたのは

嫌な思い出の筈だった

それを忘れたことはないし忘れはしない

けれど今はどんなリボンもほどける

それでも嬉しくはないのはどうしてなのか

あの時はほどくのに懸命になっていたからか

それが今では造作もない

そのことが何か楽しくないんだ

リボンはほけないからいいのかも

子供の頃はほどくのにあんなに苦労したのに

今じゃ一瞬で終わってしまう

嬉しいはずなのに何故か寂しい

ほどけたリボンを見てそれを感じる

第七章

19・サーカス

華やかな音楽と派手なアクロバット

サーカスが街にやって来た

朗らかなピエロにライオンの火の輪

そうしたものを見ていると寂しさを忘れる

けれどそれは一瞬で 舞台を去ると一層寂しい

耐えられないまでの寂しさを胸に味わう

華やかなものの側には寂しさが

いつもそつと身を寄せている

賑やかなサーカスも一歩離れれば

侘しい静けさがそこにある

けれどそれがあるから華やかさを感じられて

一息つくこともできる

高らかなラッパと大きな太鼓

サーカスの音楽が響く

身の軽い女の子にナイフが投げられ

興奮と驚きが僕達を支配してしまう

しかしそれはうたかたで サーカスの外は寂しい

それまで明るかったのが夢のように

賑やかさが背景になってしまう

寂しさを胸に感じてここでは

華やかな騒ぎもそこから出てしまえば

まるで空虚の世界にいるよう

それを暫しの間一人で味わった後でまた

舞台に向かえばいい

賑やかなサーカスも一歩離れれば

侘しい静けさがそこにある

けれどそれがあるから華やかさを感じられて

一息つくこともできる

20・夜のきざし

あの人は今日は何処へ行ったのか

ここにいるのは私一人

想いは尽きないけれど想えば想う程

憂いもまた尽きないでいる

簾から見えるのは明るい月

それを見ているのは私だけ

いつも一緒にいれくれるあの人は

今は何処で何をしているのか

考えても仕方ないことを考えながら

月を見上げてきざしはしで

硝子のグラスにワインを注いで憂いを紛らわす

あの人は勝手気ままに遊んで

私を置いてけぼりに

私の想いなんて全然考えもせず

憂いに任せるままにして

だから今は白い月を友人に

たった一人でワインを口に

あの人が私にくれた贈り物

けれど今はただの気晴らし

あの人のことを想えば切なくなつて

月に何処にいるのか聞いても

それでもわかることはあの人の移り気だけ

考えても仕方ないことを考えながら

月を見上げてきざはしで

硝子のグラスにワインを注いで憂いを紛らわす

21・ダイヤモンド

ジュエルシヨップにはじめて立ち寄って

買うのは白いダイヤモンド

彼女の誕生石を今買って

勿論彼女へのプレゼントにする

思った通り高いものだけれど

それでもプレゼントには安く思えた

白くキラキラと輝くダイヤモンド

彼女の指にはめたらそれは

どんなに奇麗に映えるだろうかと

あれこれ考えながら買うジュエル

何か僕の方が楽しんでいた

ジュエルショップは案外楽しくて

白いダイヤモンドを見て

彼女に何を言おうか考える

彼女へのプレゼントだから当然だけど

それでも言う言葉が考える

何をどう言って喜んでもらうか

輝くダイヤを見て一人笑う

彼女の左手で輝かせて

その美しさを見て笑いたい

それを思って買う白いジュエル

彼女より僕の方が楽しいかも

白くキラキラと輝くダイヤモンド

彼女の指にはめたらそれは

どんなに奇麗に映えるだろうかと

あれこれ考えながら買うジュエル

何か僕の方が楽しんでいた

第八章

22・SPEED

今動きだす時間

目に見えて速くなってきたよ

速さが全てを変えていくんだ

動かなかったものが動きだして

それが今ようやくはじまる

SPEEDが一番大事なんだ

素早く駆けて何かを掴む

だから今僕は駆け出したんだ

きつと変わる きつと掴める

その為に今必死に駆けていくんだ

僕自身が新しくなる為に

今走りだす時さ

静かにしている時じゃない

駆けていけば何かが変わる

動かないとどうしようもないよ

それが今だってやっとわかった

S P E E D が時を越えていつて

速さの中で何かを変えて

変わりたいから駆けていく

きつと見つける きつと手に入れる

僕が欲しいものを手に入れるんだ

僕自身の速さで

きつと変わる きつと掴める

その為に今必死に駆けていくんだ

僕自身が新しくなる為に

23・春の海辺

まだ肌寒い春の海

けれど冬のあの重苦しさは消えて景色は奇麗になっている

その海を見ていると不意に波音が聞こえてきた

見ればもう泳いでいる女の子がいる

寒い海の中で楽しそうに笑って

その赤い水着が目につく

白い砂浜と青い海の中で映えて

そんな彼女を見ていると夏になった気持ちになる

それにはまだ早いけれど

春の海辺は一瞬だけ夏になった気持ちになり

また春に戻る　　春の中でももう夏が近寄っていた

まだ色淡い春の海

冬の沈んだ暗い色は消えてしまい景色は淡い色彩にある

その淡い海の中で遊ぶ鮮やかな色の女の子

楽しげに朗らかに笑って遊んでいるよ

まるでそこにだけ夏があるように

赤い水着は夏の色で

白い雲も青い空もまだ春のものなのに

彼女がいるだけで急に夏になったように思えた

夏にはまだ早い筈なのに

春の海辺は少しだけ夏が来たように見えて

すぐ春に戻る　　春の中でも夏が少しずつ来ていた

白い砂浜と青い海の中で映えて

そんな彼女を見ていると夏になった気持ちになる

それにはまだ早いけれど

春の海辺は一瞬だけ夏になった気持ちになり

また春に戻る　　春の中でももう夏が近寄っていた

24・気ままなジュリエット

ロミオなんていないのにロミオばかり探して

考えることはいつも恋愛のことばかり

そんな一途で我儘なジュリエット

恋がしたくて　　恋に恋をして

本当はロミオなんか全く見ちゃいない

けれどロミオを探していつも求めて

僕を勝手にロミオにして恋焦がれる

ロミオじゃない僕はそれに戸惑うけれど

実は悪い気はしないもの

恋に恋する彼女に捧げるものは何かというと

恋愛という一輪の花　　それを心に捧げたい

ロミオはもういないのにロミオのことを考えて

何かというと言うのは恋愛ばかりな彼女

何も見えない盲目のジュリエット

恋が欲しくて　　恋に愛を向けて

実はロミオよりも恋愛を見てばかり

ロミオと恋愛を勘違いして求めている

それで僕は彼女にとっては都合よく

ロミオにされていつも慕われている

悪い気はしないものさ

恋を見てみた彼女に贈るものは一つだけ

恋愛という僕の心　それを彼女の心に

ロミオじゃない僕はそれに戸惑うけれど

実は悪い気はしないもの

恋に恋する彼女に捧げるものは何かというと

恋愛という一輪の花　それを心に捧げたい

第九章

25・トスカ

永遠の古の都　　そこで歌う一人の歌姫

聖なる天使の城で歌う彼女は

自分とトスカだと思っているのだろうか

その香る色香と美しい声はまさにトスカだ

歌に生き愛に生きそして死ぬ

トスカの運命は惨いものだけれど

少なくとも今ここにいるトスカは違うようだ

隣には楽しく笑う男がいて友達がいる

悲劇は現実には起こらない

カヴァラドゥッシはいてもスカルピアはいない

現実には案外甘い世界が続くもの

古い歴史の都　　そこで笑う一人の歌姫

聖なる天使の前にいる彼女は

きっと自分をトスカになぞらえている

カヴァラドゥッシも側にいる彼女はトスカ

歌に生き愛に生きその中にいて

トスカはこの城で惨い結末を迎えた

けれど今のトスカはそれを知らないのか

カヴァラドゥッシと楽しくおしゃべりをしている

悲劇は今のここにはないのだ

恐怖も拷問もここには存在しないから

現実は今甘い世界の中にある

隣には楽しく笑う男がいて友達がいる

悲劇は現実には起こらない

カヴァラドゥッシはいてもスカルピアはいない

現実はある甘い世界が続くもの

どうにもやりきれなくて

嫌な気分のある朝

こんな朝もあるのはわかっているけれど

どうにも気が晴れなくて困っている

見えるものも感じるものも全部

やけに不機嫌で暗鬱なもの

そうしたものをしているとどうにも

一日までが嫌に思える

そんな朝をどうにかしたいけれど

僕だけではどうにもならない

どうにも俯いてしまう

そのまま家を出ても

何もやる気がなくて帰りたくなるよ

こんな気持ちがずっと続くのかと

あれこれ考えているとそこに

彼女が来て僕に声をかける

それだけで何か急に気が晴れてきて

嫌な気分は消えてしまう

暗鬱な朝はもう何処かに消えて

彼女の笑顔だけが見える

そうしたものを見ているとどうにも

一日までが嫌に思える

そんな朝をどうにかしたいけれど

僕だけではどうにもならない

27・喧騒

どうしても騒ぎが避けられない時がある

しかも静けさが欲しい時に

どうしてもそれに巻き込まれてしまって

騒がしさに辟易してしまう

疲れて困ってしまう

しかも自分ではどうしようもない

へとへとになって何とか逃げ出しても

そこにあるのは虚しさだけ

どうにも疲れてしまった夜に

慰めも何も見出せず一人静けさを恋い慕う

何をしても騒ぎから抜け出せずにいて

静けさが欲しいのに得られない

どうしてもそれに捉われてしまっていて

喧騒に翻弄されるばかりになる

疲れ果ててしまって

自分では何もできずに流されて

ようやく抜け出したその先にあるのは

静けさではなく寂しさだけだ

虚無が支配する冷たい夜に

疲れ果てた身体を引き摺って闇に帰る

へとへとになって何とか逃げ出しても

そこにあるのは虚しさだけ

どうにも疲れてしまった夜に

慰めも何も見出せず一人静けさを恋い慕う

第十章

28・春眠

深いものだとは思っていたけれど

こんなに深く眠るとは思っていなかった

身体も何もかもをその中に置いて

気付けば時間だけが悪戯に過ぎていた

春の眠りは永遠で

その誘惑に勝つのは難しい

心も身体も疲れきった人は

その誘惑の中に落ちていく

ふと目覚めるとその周りには

儚く散った花達が

風と共に舞い降りている

落ちるとそのまま行ってしまうような

そんなに深い眠りは久し振りのことだった

心もその全ても眠りに任せてしまつて

気付けば太陽が僕を迎えてくれていた

春の眠りは穏やかで

その惑わしに勝つのはできない

全てを使い切つた人は

その惑わしの中で安らぐ

ふと目覚めるとその耳には

不如帰や鶯の声が

穏やかな緑と共に来る

心も身体も疲れきつた人は

その誘惑の中に落ちていく

ふと目覚めるとその周りには

儚く散つた花達が

風と共に舞い降りている

29・わずらわしさ

生きているとわずらわしさがつきまとう

それは逃げてでも逃げてでもやって来る

静かに暮らしていたくてもそれは来る

完全に一人になることはできない

人はいつもわずらわしさと付き合っていく

嫌でも世の中はわずらわしいまま

けれどそのわずらわしさと前にして

そこから考えるのもいいだろう

わずらわしくても前を見据えて

それを乗り越えていけば最後はきっと

わずらわしさも克服できる

生きていると嫌になることだつてある

嫌にならないことがないなんてない

静かな中でもふと嫌悪に包まれたりも

どうしてもそれはつきまとうもの

人は嫌なこともあれば他のこともあつて

嫌でもそうしたこととは刎ねられない

けれどその嫌なことから逃げずに

前を歩くのも一つのやり方だ

嫌なことでも逃げずに向かつて

それを突き抜けてけば何時かきつと

その人は大きくなれるかな

けれどそのわずらわしさと前にして

そこから考えるのもいいだろう

わずらわしくても前を見据えて

それを乗り越えていけば最後はきつと

わずらわしさも克服できる

女の子でも恋はする　　むしろ女の子だから恋をする

その相手は決して男の子とは変わらない

人知れず手を握り合って

女の子同士で歩いていたりする

家から学校までの秘密のデート

誰にも知られないように　　誰にもわからないように

それはこっそりと行われていくもの

まだそれは淡い恋で　　プラトニックだけれど

お互いを見て　　お互いを意識して

そうして育んでいく　　小さな愛

女の子だから恋を　　女の子だから恋をするのかも

けれど恋は男の子だけに向けられはしない

二人きりになるとそっと

囁く言葉は告白の言葉だし

見るのはお互いの顔で離しはしない

皆にばれたりしないか 皆にわからないだろうか

不安に思いながらもそれを続ける

まだそれは静かな恋で キスも何もしないけど

お互いを感じて お互いを愛して

そうして抱き合う ささやかな恋

まだそれは淡い恋で プラトニックだけれど

お互いを見て お互いを意識して

そうして育んでいく 小さな愛

2007・4・22

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1870g/>

春の歩道

2010年10月9日12時51分発行